over view

広島県福山市の繊維産業は、「備後絣」という共通のルーツを起点に発展してきました。一方、現在は紳士服、ワークウェア、デニムなどへと事業が枝分かれし、さらには分業化された生産工程という産業構造のため、産地内に点在する繊維関連企業を把握しづらいのが現状です。

本冊子は、「エコアクション」をテーマに繊維関連企業の技術や取組みを可視化することを目的としています。それらの技術が掛け合わされ、あるいは取組みへの共感が生まれるきっかけをつくることで、新たな価値の創出と、その先にある持続可能な繊維産地の実現を目指します。

瀬戸内
ふくめぐり
プロジェクト

このパンフレットは環境省『令和７年度地域の資源循環促進支援事業』の一環で作成しています。

瀬戸内ふくめぐりプロジェクト

Eco-initiatives Launched from Fukuyama : A Major Production Area in Japan

繊維産地福山からのエコアクション

プロジェクトの背景

衣服をつくり続けられる繊維産地の未来を描く

広島県福山市の繊維産業は「備後絣」という共通のルーツを起点に、長い歴史の中で時代のニーズに寄り添いながら形を変え、今日の紳士服、ワークウェア、デニムなどへと発展してきました。

欧州を中心にアパレル産業がよりサステナブルな方向へと進みはじめる中、私たちもまた、大量消費に依存しない、これからの時代にふさわしいものづくりへと転換していく必要があります。この地域にあるひとつひとつの素材や技術に改めて光を当て、それらを結び直すことで新たな価値を生み出し、将来にわたって衣服をつくり続けられる繊維産地の未来を描いていきます。

-方向性-

繊維関連企業の可視化

産地への信頼・安心の醸成

繊維関連企業の技術や取組みを可視化することで、この産地でつくられた衣服への信頼感・安心感を醸成します。

企業間の連携・共創

技術が掛け合わされ、あるいは取組みへの共感が生まれるきっかけをつくり、企業間の連携・共創を促します。

-方向性-

感情的耐久性の延伸

愛着の再確認

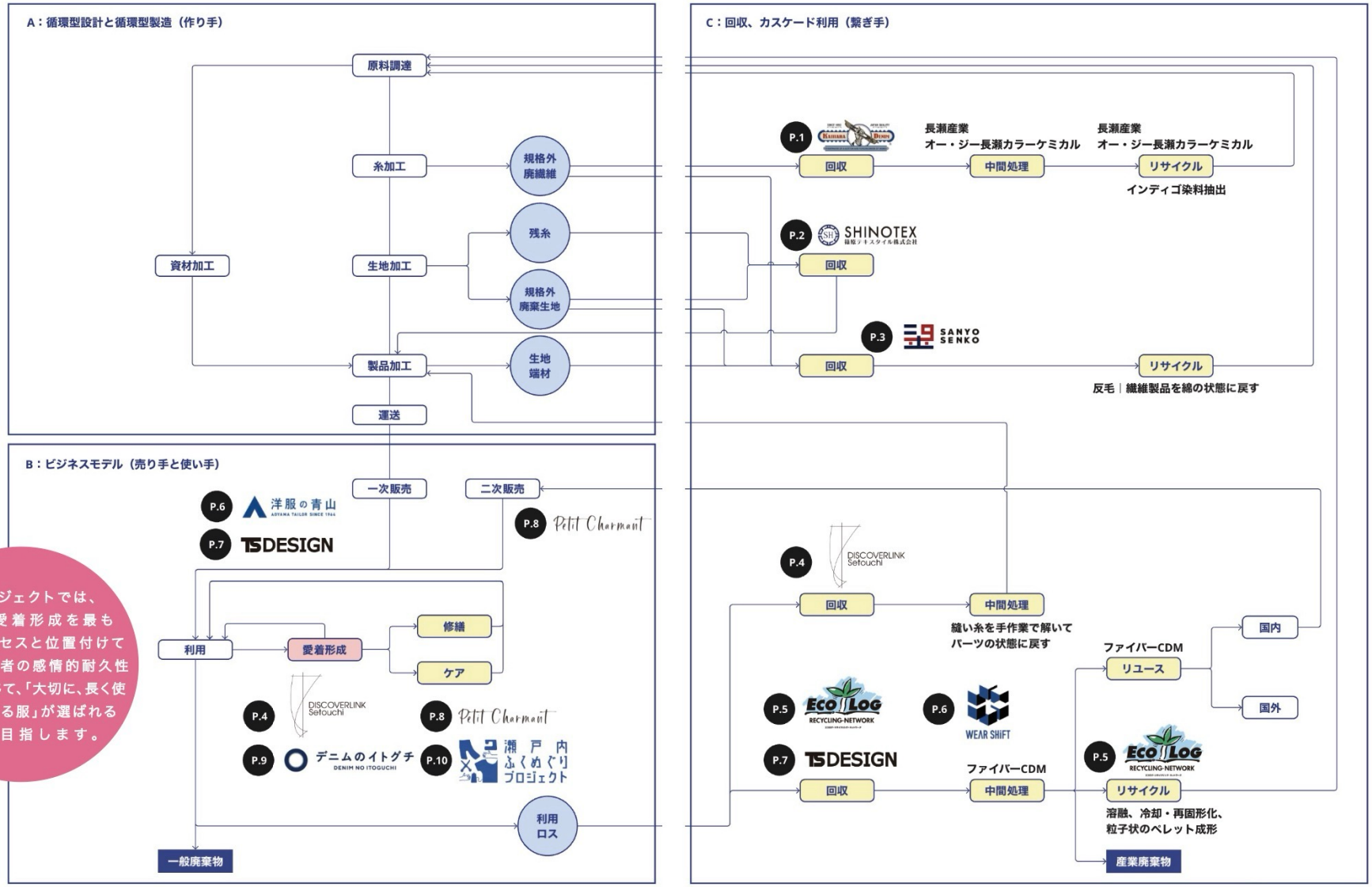
衣服を手放す前に、その衣服への愛着を再確認する機会をつくります。

手放す以外の選択肢を

リユースやリペアなど、衣服を「捨てる」以外の選択肢を提案します。

重層的循環システムマップ
- circular diagram

このマップは、繊維関連企業のエコアクションを可視化することを目的としています。
技術が掛け合わされ、あるいは取組みへの共感が生まれるきっかけをつくることで、
新たな価値の創出と、その先にある持続可能な繊維産地の実現につなげます。

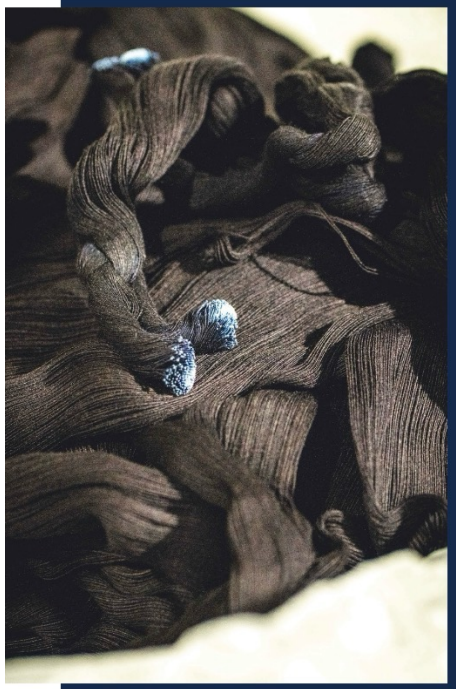


本プロジェクトでは、衣服への愛着形成を最も重要なプロセスと位置付けています。消費者の感情的耐久性の延伸を通じて、「大切に、長く使い続けられる服」が選ばれる社会を目指します。

EnzyBlue | リサイクルインディゴ染料

廃繊維の再資源化

カイハラ株式会社
福山市新市町　TEL (0847) 57-8111



開発の早期段階から販路確保に着手

デニムの経糸をインディゴに染める工程で発生する規格外の廃繊維。そこから抽出されたのが、リサイクルインディゴ染料「EnzyBlue」です。この染料を再びデニムの生産サイクルに乗せていく取組みは、カイハラ、長瀬産業、オー・ジー長瀬カラーケミカルの3社の協業によるもの。

2025年にはEDWIN KYOTO SANJOの1周年限定モデルに採用され、デニムファンの日常を彩っています。

このような製品は、リサイクルコストが価格に転嫁されやすく、販路がなかなか見つからないケースも少なくありません。

そうした中、このプロジェクトでは開発の早期段階から販路確保に着手したことが、実現の大きな要因となりました。

生産背景にあるストーリーを情緒的価値に変換

デニムは多くの工程を経てつくられる生地。そのため、複数企業による分業制が一般的です。

一方、カイハラは紡績から整理加工まですべての工程を自社で行なっています。デニム産業の縮図とも言える同社の一貫生産体制。それゆえに「原材料として仕入れたものが、産業廃棄物として排出される」というジレンマと向き合う場面も多かったと言います。

今回のプロジェクトでは、年間約3.5トンの廃繊維を再資源化。「EnzyBlue」で染められた糸から約1万5千メートルの生地が織られています。

難しかったのは、染料の品質を担保した結果、従来品とリサイクル製品に差異が生まれなかった点です。すなわち、リサイクルによる価格上昇分は、生産背景にあるストーリーの価値そのものということ。この情緒的価値が市場に受け入れられるか未知数な中、販路を担うEDWINの共感を得られたことが重要なポイントでした。

リサイクル製品は、目の前にある廃材をどう活かすかが出発点となるため、プロダクトアウトに比重が寄りがちですが、リサイクルを「つくる」で終わらせず、社会へ価値を広げていくためには販路が欠かせません。そのことに改めて気づかされる好例となりました。

SHINOTEX

残糸・廃棄生地のアップサイクル

篠原テキスタイル株式会社
福山市駅家町　TEL (084) 976-1511

生産量日本一のデニム産地特有の課題にアプローチ

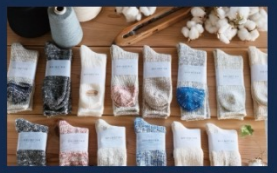
デニム生地を織る過程で余った糸。わずかなキズで市場価値が下がり、流通できない生地。そういった廃棄を何かに活用できないかという想いから2019年に始まったのが、これらを生産工程由来素材としてアップサイクルした「SHINOTEX」です。

篠原テキスタイルは、糸から生地を織る機屋。生産量日本一のデニムのまち・福山市だからこそ、大量に発生する残糸や廃棄生地に課題を感じました。そこで、産地内の企業とともに、取組みの第一弾として、残糸を活用した靴下の開発がスタートしました。

3tの廃棄が売上の5%に

現在、「SHINOTEX」の売上は、企業全体の約5%を占めるまでに成長。その背景には、それまで生地の販売を行うのみだった取引先との情報交換や共同開発など、新しい関係性を築けたことが大きかったと言います。この取組みの背景を伝えることで共感が生まれ、そこから企業別注製品を受託するなど、次なる事業も生まれています。

また、福山市をはじめとする行政との協働や、メディア露出を通じた認知向上など、売上以外にも経営上のメリットをもたらしました。現在では、「SHINOTEX」を取り扱う店舗は広島県内で10店舗以上となり県外にも徐々に広がりを見せています。



地域全体をものづくりのパートナーと捉える

従来のデニム生地の販売先が、共同開発のパートナーへと変化するなど、新たな関係性を構築している篠原テキスタイル。創業110年を超える歴史の中で培った知見と技術を基盤に、福山の地に根差した活動を展開しています。

地域企業、教育機関、行政との連携プロジェクトにも積極的に関わり、多くの企業・人との対話と試行を重ねながら新しいものづくりを育んでいます。

規模や立場を問わず共に挑戦し続けるこの姿勢が、地域発の価値創出につながっています。

事業者版 | FUKUYAMA アップサイクルプロジェクト

廃繊維や生地端材の再資源化

山陽染工株式会社・中国紡織株式会社ほか
福山市一文字町　TEL (084)953-2828

SANYO SENKO

中国紡織株式会社

「デニム回収量日本一」に向け循環を加速

FUKUYAMAアップサイクルプロジェクトは、「デニム生地生産量日本一の街を、回収量も日本一の街へ」という目標を掲げ、2024年に始動しました。

当初は、衣服としての役目を終えたデニム製品を回収し、再資源化するという「消費段階」に着目したアプローチでしたが、「製造段階」で廃棄されていた糸や生地にも目を向けることで、循環の輪がさらに広がっています。

福山市内のデニム関連事業者から持ち寄られた廃繊維や生地端材は、反毛という技術によって繊維へと再生されます。この繊維を20%、綿を80%の割合で混ぜて紡がれた糸は、再びデニムの製造工程へと舞い戻っていきます。

再生糸の個性を活かした独創性あるものづくり

再生糸の特徴は、元の素材に由来する柔らかな青系色。

山陽染工とそのグループ企業である中国紡織は、この特徴を最大限に生かしたデニム製品の開発に取り組んでいます。

特筆すべきは、緯糸だけでなく、一般的にインディゴで染められる経糸にもこの再生糸を採用している点です。これにより、通常糸を染め、生地を色落ちさせて表現する淡いブルーに近い色を再現することができます。

また、デニム特有の課題である色移りを軽減したほか、山陽染工の強みであるプリント加工においても表現の幅が広がり、同社が重視する独創性あるテキスタイルの1つとなっています。

さらに驚くべきことに、この製法によりつくられるデニム生地は、リサイクルにかかるコストを含めても、従来品とほぼ変わらない価格で提供されています。

製造業全体で環境意識が高まる中、単に「環境に配慮している」というだけでは製品の差別化が難しくなっています。

価格や機能といった基本的な価値を前提に、背景にあるストーリーまでを届けるこの取組みは、消費者に選ばれる理由を備えた次世代のものづくりの可能性を示しています。

REKROW

役目を終えたワークウェアの再構築

株式会社ディスカバーリンクせとうち
福山市新市町　TEL (0847) 44-9833

DISCOVERLINK Setouchi

ものづくりの産地から始まるサーキュラーエコノミー

この繊維産地におけるサーキュラーエコノミーの実現を目指すプロジェクト「REKROW(リクロー)」。

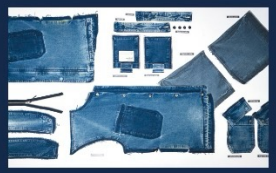
ディスカバーリンクせとうちが手がけるこのプロジェクトは、従来、役目を終えれば捨てられていたワークウエアを見直し、作り方や捨て方、その先の使い方までを想定した新しいものづくりの試みです。

REKROWでは、着古されたデニム製のワークウェアを回収し、縫い糸を手作業で解いてパーツの状態に戻したものを、デニムという素材が持つ経年変化による魅力的な表情を活かしながら、さまざまな製品へと生まれ変わらせています。

それは単なる製品のリメイクではありません。ものづくりや製品の背景、そして着た人の日々の仕事が刻まれたワークウェアのかっこよさに価値を見出しながら、バッグやスニーカーといった雑貨から、ソファやアームチェアなどの家具まで、さまざまなプロダクトを開発しています。繊維産地だからこそ実現できること。そして、ものづくりの技術を次世代へと継承していくこと。産地型のサーキュラーエコノミーを実現する上で欠かせない要素です。

「長く着続けたい」をリペア技術で叶える

デニムの魅力である経年変化。ディスカバーリンクせとうちでは、長く使い続けることを通じてその魅力を感じてもらうため、リペア技術を伝える機会づくりに取り組んでいます。



これまで消費者にとってのエコアクションは、リサイクルやリユースなどの「手放す」選択肢が中心でした。そこに、ものづくりのサイクルの中にある「直す」という選択肢を加えることで、より長く、より大切に使い続けたいという想いを受け止める土壌を、この産地で育てています。

リペアをはじめ、この産地に息づく技術を可視化していくこと。それが、繊維関連企業と消費者がともにつくる新しいサーキュラーエコノミーの礎となるのかもしれません。

マテリアル・リサイクル

ポリエステル系衣類の再資源化

株式会社エコログ・リサイクリング・ジャパン
福山市草戸町　TEL (084) 924-8509

繊維産業の将来予測が生んだ先駆的な取組み

消費された後のことまでを考えて製品を設計する。今でこそ広まりつつあるこの考え方を1994年から先駆的に実践しているのが、エコログ・リサイクリング・ジャパンです。

同社は、メンズ&レディスアウターの企画・販売を手がける株式会社ワッツの先々代社長が、ライフサイクル調査を通じて、多くの衣服が廃棄されている現実に直面したことをきっかけに設立されました。当時すでにヨーロッパでは環境意識の高まりが見られ、日本でも近い将来、製品の廃棄段階までメーカーの責任が問われる時代が訪れる――そんな潮流を見据えての決断でした。

エコログの主な事業は、ポリエステル系衣類のマテリアルリサイクル。回収した製品からボタンなどの副資材やポリエステル以外の素材を取り除いた上で溶融し、冷却・再固形化したものを、粒子状のペレットに成形します。

このペレットは、原材料として販売されるほか、新たなポリエステル系衣類やプラスチック製の雑貨などへと再生されています。

同社では、回収から再資源化、製造、販売までをつなぐ循環ネットワークを構築。全国50社以上の企業が参画し、年間約200トンもの役目を終えた衣服から新たな製品を生み出しています。

環境負荷軽減効果の高いマテリアルリサイクル

驚くべきは、この取組みがもたらす環境負荷軽減効果の高さです。衣服を焼却処分した場合と比べ、マテリアルリサイクルでは約90%のCO_2削減効果が期待できるとされています。

また、ポリエステル単一素材の衣服であれば、その100%を再資源化でき、理論上は何度でもリサイクルを繰り返すことが可能です。石油由来のため環境負荷が高い印象を持たれがちなポリエステルですが、資源循環の観点に立てば効率的な素材と言えます。

売れ残った衣類の廃棄禁止など、欧州を中心に繊維産業が一層サステナブルな方向へと舵を切る中、かつての将来予測は、いまやものづくりのスタンダードになりつつあります。

WEAR SHiFT

衣類の回収と再利用・再資源化

青山商事株式会社
福山市王子町　TEL (084) 975-3939

消費者・関連企業参加型のエコアクション

「終わらない服をつくろう」。

そんな社会への呼びかけとともに、役割を終えた衣服を店頭で回収し、再利用・再資源化を行う青山商事の「WEAR SHiFT」。

約30年前に販促の一環で始まった紳士服の下取りは、社会的ニーズの変化とともに形を変え、消費者や関連企業とともに環境負荷軽減を目指すという重要なプロジェクトになりました。

その背景にあったのは、自社の経済活動が今の世の中にどう映るか客観的に見つめ直す地道な作業。それを実行したのは、意外にも情報発信を担うセクションでした。

社会的評価に裏付けられたブランドイメージを発信

青山商事では、「WEAR SHiFT」以前にも「AOYAMAの森」に代表される森林保全活動のほか、さまざまなエコアクションに取り組んでいました。しかしその中には、断片的な取組みのまま注目が集まらないケースもあったと言います。

そこで、それらひとつひとつの取組みを組織横断で繋ぎ合わせるとともに、社会からの共感を得られるか、という視点で再編集を試みました。

結果として、官公庁やESG評価機関など外部からの評価を受け、社会的評価に裏付けられたブランドイメージの発信につながっています。

「WEAR SHiFT」についても環境省のグッドライフアワードを受賞。年間350トンもの衣服を回収しその99%を価値あるものに生まれ変わらせるという環境負荷軽減効果に加え、企業価値向上という経営上のメリットをもたらしました。

自社を客観的に見つめ直す過程で従業員の創意工夫を可視化できた点も成果の一つです。また、それらが社会的に評価されることで従業員のモチベーションが高まり、さらなる創意工夫につながる好循環が生まれています。

現在では「サステナビリティデータブック」という形で、100ページ以上にわたり青山商事全体の取組みを公開。視覚デザインでの差別化が難しい紳士服において、「社会からの共感」を形成し、伝えていくことが、お客様に選ばれる理由なのかもしれません。

ワークウェアのリサイクル

衣服の回収と再資源化

株式会社 TS DESIGN
福山市卸町　TEL (084) 920-3600

ワークウェアの構造的課題へのチャレンジ

ワークウェアは、その使用シーンの特性上、汚れや破れが生じることを前提に選ばれやすい衣服。仕事着であるがゆえに、機能性や耐久性、安全性が優先され、製品の生産背景など情緒的な価値が訴求されにくい構造となっています。

そのような構造の中、ワークウェアの企画・製造・卸販売を手掛けているTS DESIGNが始めたのは、ポケットの袋布に使われるポンジ生地やボタンなど、衣服を構成するパーツを、リサイクル原料由来の素材へと少しずつ代替していく取組みです。

そのリサイクル原料は、同社が全国の企業へ卸したワークウェアをエコログ・リサイクリング・ジャパンとの協業により回収し、再資源化したもの。衣服としての役割を終えた後も、ポリエステル素材の100%が循環し、新たなワークウェアの一部として再び現場へと戻っていきます。

「三方よし」の考え方で着実なエコアクションを

TS DESIGNは、この繊維産地で60年以上にわたり服をつくり続けている会社。その歴史を支えてきたのは、自社の利益のみを追求するのではなく、取引先や地域、さらには社会全体に価値を還元していく「三方よし」の考え方でした。今回の取組みもまた、環境配慮というテーマを掲げながら、その根底には変わらぬ姿勢があります。

特に注目したいのは、機能的価値が重視される業界の中、この取組みの意義をどう取引先のメリットに変換するかという点。

TS DESIGNは、自社のワークウエアを「選ぶだけで実践できる環境配慮」として伝えました。人手や時間の制約からなかなかエコアクションに踏み出せない中小企業にとって、このワークウェアを採用すること自体が環境への取組みの一歩になる。その分かりやすさが共感と広がりを生み、今では法人営業の現場で提案材料の1つとなっています。

派手な技術革新ではなく、日々使われるワークウェアの中に循環の仕組みを組み込んでいく。無理のない形で、しかし着実に、社会を前に進めています。

子供服のリユース

消費者接点を通じた衣服への愛着醸成

プチシャルモン
福山市大国町

愛着のある子供服をその想いとともに循環させる

子どもと過ごした日々の思い出とともに、少しずつ愛着が積み重なっていく子供服。けれども成長の早い子どもたちは、あっという間にサイズアウトし、いつしかその服を手放さなくてはならない日が訪れます。

大切な子供服を、まだ十分にきれいな状態なのに捨てるのは抵抗がある。そんな保護者の気持ちを受けとめ、つないでいきたいという想いから2022年にオープンしたのが、「子供服の古着のお店 プチシャルモン」です。

フリマアプリなど、インターネット上での個人間取引が主流となる中、あえて実店舗型のリユース事業を選んだ理由。それは、子供服の売買にとどまらない、体温の通ったコミュニケーションこそが、思いと資源の循環を地域に根付かせることができると考えたためでした。

消費者との接点を通じて製品の背景を伝える

プチシャルモンでは、子供服を買い取る際、その服にまつわる思い出や、お気に入りだったポイントをお客様から丁寧に聞き取っています。そして託された言葉はメッセージカードにしたためられ、子供服とともに店頭へと並びます。服を手に取る次の持ち主は、そのメッセージを受け取る体験とともに、新たな一着を迎え入れていきます。

大量の衣服を扱う店ではないからこそ、プチシャルモンでは「いつもよりちょっといい服」に、こうした体験価値を添えて届けています。そのため、来店するお客様は、服に込められた物語に共感する人たちが自然と集まります。

最近では、助産師が考案した草木染めの布ナプキンなど、子供服に限らず、オーナー自身がその背景にあるストーリーに共感した商品も取り扱っています。

ものづくりには、多くの想いや工夫が込められていますが、作り手が直接消費者との接点を持つ機会は多くありません。だからこそ、製品を媒介に、その背景にある物語を届ける「語り部」の存在は、改めて貴重な存在です。

デニムのイトグチ

デニム製品への愛着醸成

デニムのイトグチ
福山市駅家町　TEL (084) 976-1511

業種や地域を超えた共創が規格外品の用途を広げる

デニムのイトグチは、「デニムの魅力を産地から」をテーマに、関連事業者が企業の垣根を超えて集い、活動するプロジェクトです。

2023年にスタートしたこのプロジェクトでは、催事への出展、工場見学ツアーの開催、学校での出前授業などを通じ、デニムをつくる人と使う人との接点づくりに積極的に取り組んでいます。

製造工程が分業化された産業構造ゆえに、デニム事業者が点在するこの産地を「面」で捉え、地域全体を盛り上げようとするこの取組み。同業者のみならず、行政、教育機関、さらには業種や地域を越えた共創の種が、少しずつ芽吹いています。

そうした中で多く寄せられるのが、「デニムを使って何かつくりたい」という相談です。

そこで活躍するのが、わずかなキズによって市場に出せなくなった生地。従来捨てられていたこれらの規格外品は、いわゆる「よそもの」の視点が加わることで、雑貨製品の素材や装飾資材、ワークショップ用の資材などへと生まれ変わっています。

デニム事業者にとっても、ファッションアイテムとしての用途にとらわれない形で使用されることで、デニムが当たり前にある日常が少しずつ広がっている――そんな手応えを感じています。

経年変化を楽しむことで衣服への愛着が育まれる

生産量日本一を誇るデニム産地の内外をつなぐ、まさに「いとぐち」となっているこのプロジェクト。

さまざまな接点を通じて伝えているのは、デニムが持つ「経年変化」の魅力です。作り手だからこそ語ることのできる生地のメカニズムや生産背景とあわせて伝えることで、デニムの面白さに気づくきっかけをつくっています。

リペアや染め直しなどの選択肢がある中で、衣服が捨てられる瞬間は、損耗し機能を失ったときではなく、その人の愛着が失われたとき。使い続けるほどかっこよくなるデニムという素材を通して、衣服への愛着を育む文化をつくっていきたい。そうデニムのイトグチは考えています。

瀬戸内ふくめぐりプロジェクト

衣服への愛着醸成（感情的耐久性の延伸）

瀬戸内ふくめぐりプロジェクト
福山市草戸町　TEL (084)924-8509

大量消費に依存しないものづくりへの転換

瀬戸内ふくめぐりプロジェクトは、広島県福山市を中心とする繊維の一大産地から、大量消費に依存しないものづくりへの転換を目指し、2025年に始動した取組みです。

このプロジェクトでは、大きく2つの方向性を掲げています。

ひとつは、備後絣を共通のルーツに、紳士服、ワークウェア、デニムなど枝分かれしながら発展してきた産地の技術を再結集し、新たな技術革新の土台を築くこと。

もうひとつは、衣服への愛着を育み、モノを大切に使い続ける文化を社会に広げていくことです。「少し高価でも、大切に、長く使い続けられる服を選びたい」。

そんな価値観があたりまえにある社会と、その想いに応える技術を持つ繊維産業。その両立こそが、産地の未来を切り拓くカギだと考えています。

「愛着」を媒介につくり手と使い手がつながる

現在、このプロジェクトでは、特に「愛着」に軸足を置いた取組みを進めています。

着なくなった子供服を、その服にまつわる思い出を綴った手紙とともに次の持ち主へつなぐ「こども愛着シェアクローゼット」を、子育て世帯が多く訪れる場所に設置したほか、学校での環境学習の一環として、タンスに眠る服を持ち寄って行うファッションショーを開催。いずれも、着なくなった服を見つめ直し、愛着を再確認する仕掛けとして設計しています。

また、こうした取組みを通じて生まれた「まだ着続けたい」という気持ちに寄り添うため、リペアなどの選択肢づくりにも着手。加えて、損耗が激しい衣服については、廃棄以外の道を示せるよう、再資源化に関する繊維関連企業のエコアクションや技術の調査・可視化に取り組んでいます。

「愛着」を起点に、衣服を使い続けるための選択肢と、使い切った後の選択肢を提示し続けること。その時々で、衣服をつくる側と使う側の接点を持ち続けること。

その継続性が、やがて文化へと昇華していくのかもしれません。